

フッサール現象学の鍵概念(2):「志向性」

富山 豊

(千葉工業大学 情報科学部教育センター)

1. はじめに

「志向性」という概念がフッサール現象学の諸概念の中でもとりわけ中核に属する鍵概念であることを疑う人は少ないだろう。その内容についても、「意識とは何かについての意識である」といった仕方で、おおよそ漠然とした理解は共有されているかに見える。じっさい、多くのフッサール入門書、現象学入門書においても、この概念はそうした簡潔な特徴づけを確認されたうえで、既知の説明項としてそれ以上問われることなくその後の論述に用いられることが通例であるように思われる。

しかし、「志向性」という概念は果たしてそれほど自明なものだろうか。たとえば、意識、あるいは心的状態と呼ばれうるようなものは、必ず「何かについて」のものでなければならないのだろうか。ある種の感情や気分、感覚のように、何らかの対象についての内容を持たず、ただそれ自体として感じ取られるだけの意識状態・心的状態というものもあるのではないだろうか。あるいはまた、何らかの対象について考えていると自分では思っている、あとからその対象が存在しなかったと判明することはないだろうか。たとえば推理小説で警察や探偵によって探し続けられていた犯人や凶器が、じつは最初から存在しなかったと判明するような場合がある。これと同様のことは当然現実にも起こりうるだろう。さらにまた、こうした場合の志向性について考えることから導かれる問いとして、我々が「それについて考えている」と言われるところのその志向性の「対象」とは、現実に存在する実在の「物」なのだろうか、それとも思考する主体の心の中に設定された何らかの「像」や「観念」といったものなのだろうか。そしてまた、もし仮に志向性の対象が現実に存在する「物」なのだとする、まだ目の前にその対象の現物は与えられておらず、それどころか本当に実在

するのかどうかすら確証が得られていないうちから、その思考がほかならぬ「その対象」についてのものであって他の対象についてのものではない、ということはいったいその思考のうちの何が保証するのだろうか。人々がある対象について思考し、それについて相互に語り合い、議論している際に、それが「同じ対象について」の思考であり、共通に同じものを問題にしているということはいったい何によって保証されるのだろうか。

「志向性」という概念には、少し省みただけでもこうした様々な哲学的問題の種が無数に含まれている。もちろんこうした問題をいったん脇に置いて、志向性を所与として分析できる応用的な問題も多々あるだろう。しかしフッサールの哲学的労苦のかなりの部分はこうした「志向性」の成立そのものをめぐる議論に費やされており、入門書で様々な現象学用語を覚えたもののいまひとつフッサールのテキストが読めるようにならない、現象学が何を問題にしているのかいまひとつピンとこない、といった初学者の躓きの原因のひとつは、まさにこの「志向性」の成立そのものを問うという問題設定を素通りしてしまったことにあるように思われるのである。

そこで本稿では、この「志向性」の成立そのものをめぐる哲学的問題の所在とそのフッサール的な解決の方向性を素通りせずに立ち止まって解説することを試みる。なお、この課題を筆者は『フッサール：志向性の哲学』（青土社）において単著の形で既に詳述したことがあり（富山 2023）、本稿はそれと大部分重なりつつその要点を簡略化した解説と、そこで述べ切れなかった論点への補足から成っていることをお断りしておく。本稿の論述で理解し切れない部分があった場合には、ぜひ拙著を合わせてお読みいただきたい。

2. 志向性の問題：無対象表象の問題と対象識別基準の問題

「志向性」という概念そのものがそれほど自明のものではなく、様々な哲学的問題を抱えたものであることは既に触れた。本稿では、その中でもとりわけ以下のふたつの問題を取り上げ、それに対してフッサール現象学がどのような解決を与えたのかを概観したい。その問題とは、無対象表象の問題、すなわち対象として考えられているものがじっさいには存在しない場合の志向性をどう考えるかという問題と、対象の識別基準の問題、すなわち我々の思考のうちの何がその思考を特定のある対象についての思考とし、他の対象についての思考ではないものになっているのかという問題である。

はじめに、無対象表象の問題がいったいどのように問題なのかを確認する。現実にはこの世界に実在しないが単に想定されたものとしての対象、いわば「志向的对象」について我々が考えることができ、あるいはまた実在するかと思われた対象について考えていたが、のちに実在しないことがわかり、それについて考えるのをやめるということはごくありふれたことに思われ、そこに何ら哲学的にことさら問題になるようなことは何もないようにも思われるからである。だが、この事実ありふれた我々の経験を正確に説明しようとすれば、そこには必ずしも自明ではないいくつかの困難が存在する。

まず確認しなければならないのは、フッサールが志向性を単に心的作用にしばしば見られる頻出の特徴ではなく、心的作用にとって本質的な、必然的に見出される特徴と考えていることである。フッサールは『論理学研究』第五研究の中で師ブレンターノの「心的現象」に対するふたつの規定を取り上げながら、以下のように述べる。

我々が優先的に取り上げるふたつの規定のうち的一方は、心的現象ないし心的作用の本質を直接に明示している。その本質は任意のどの例においても紛れようもなく迫ってくる。知覚においては何か知覚され、想像表象においては何か想像的に表象され、言明においては何か言明され、愛においては何か愛され、憎しみにおいては何か憎まれ、熱望においては何か熱望される等々である。(XIX/1 380)

当該テキストの後続の記述から、この規定こそがいわゆる「志向性」であることは明らかである。ここで注目すべきは、この規定が心的作用の「本質」を示しており、「任意のどの例においても」確認されるものだということである。我々は様々なものを愛することができる、その対象は一般には人間とは限らない。家族や恋人を愛することもできれば、フィクションのキャラクターやペット、人形やぬいぐるみ、思い出の品、芸術作品や料理、平和や平等や学問といった抽象的なものまで愛することができるように思われる。だが、愛の対象がいかに様々であれ、ともかく「何らかの対象について」、何らかの対象に対して愛が向けられるということは決して動かないように思われる。我々は自分がじっさいに愛しているその対象ではなく別の対象を愛してみると請われれば、じっさいに本気でそれを愛せるかどうかはともかくも、請われていることの意味は理解できるし、愛してみようと試みてもできるだろう。しかし、いかなる対象をも愛することなく、対象なしにただ「愛する」という心的作用だけを遂行してみると請われたならば、それを実現するどころか、いったい何を試みれ

ばよいのか理解すらできないのではないだろうか。「私は心の底から、本気で愛しているんだ」と主張する人がいたとする。「いったい何をそんなに愛しているんだい」と問う。するとその人は「いや、何かを愛しているわけではない。私が愛している対象が何かあるわけではない。私はただ純粋に愛しているんだ。「愛する」という行為だけを、対象なしに、ただ純粋に行っているのだ」と答える。このとき我々は、彼の主張を受け入れ、彼が「愛する」ということを正しく行っていると考えることができるだろうか。これは、彼が自称しているだけの主張に信憑性がどれだけあるかという話ではない。そうではなく、我々は彼の主張をたとえ信じようと努めたとしても、彼の言うそれを我々の知るあの「愛する」という心的作用として理解することが決してできないのではないだろうか。

以上のように、ある種の意識状態ないし心的状態、つまり知覚や想像、愛憎や熱望のように志向性を持つと考えられる一群の「心的作用」は、単に大抵の場合には志向性を持つというだけでなく、本質的に「何かについての」ものとしか理解できないのであり、したがっていかなる場合にも必然的に志向性を持つように思われる。それゆえそれは場合によって対象を持ったり持たなかったりするものではないのだから、じつは対象を持たなかったということがあとから判明したりすることもないと考えられる。「何についての」愛憎なのか、「何についての」熱望なのか、という対象への志向性は、それがどのような愛憎なのか、どのような熱望なのかというその心的作用そのものの本質的特徴なのであり、志向性が異なればそれは異なる内容を持った作用であるということになるだろう。たとえば我々は、「君は僕を愛していると言っていたが、じっさいには君が愛していたのは僕の財産じゃないか」といったことを言う。つまり、対象が私であるような愛と、対象が私の財産であるような愛とでは、「何についての愛であるか」という志向性の内容が異なるのであり、それゆえその点において異なる性質を持っているのだから、両者は心的作用として異なるものなのである。このように、志向性はある心的作用が「どのような内容の心的作用なのか」というその作用の内在的性質であるように思われる。

他方、志向性はまた単に心的作用の内在的性質であるだけでなく、心的作用と(必ずしも心的とは限らない、一般には心的作用に対して超越的であるような)現実の対象そのものとの「関係」であるようにも思われる。たとえば先の例で言えば、「彼女は私を愛している」と信じているとき、私は私自身を指して「私は彼女に愛されている」と述べることができる。このとき、志向性は単に彼女の心的作用が持つ性質であるだけでなく、彼女の心的作用とその対象である私自身とのあいだの何らかの関係であるように思われる。『オセロウ』の終幕の間に、「デズデモーナが愛していたの

はキャッシュではなく私だったのだ」と気づくとき、オセロウは単にデズデモーナの心的作用がどのようなものであったかという内在的性質について取り違えていただけでなく、それがキャッシュとオセロウというふたつの対象のうちどちらと関係しているのか、という関係についても取り違えていたはずである。つまり、デズデモーナの愛という心的作用の志向性は、単にその愛の性質であるだけでなく、オセロウという対象それ自身との間に成り立つ何らかの関係でもありと考えられるのである。

ここに、ある心的作用の内容的な特徴づけであるはずの志向性が、なぜ、どのようにして、(一般には)心の外にある(かもしれない)対象そのものとの間に関係を成立させるのか、何がある作用に特定の対象との関係を保証しているのか、という志向性の成立の問いが生じてくる。いやそもそも、そのような保証は本当に成り立つのだろうか。志向性の関係は、本当に現実の対象そのものの現物に対して結ばれていると言えるのだろうか。

さらにまた、先に予告したように、ここには無対象表象の可能性という大きな問題が横たわっている。我々はフィクションのキャラクターなどのように実在しないとわかっている対象について考えることもできるし、科学的仮説や曖昧な目撃証言を元にする場合のように、実在するかどうか判然としない対象についても考えることができる。シャーロック・ホームズやペガサスについて考えるのは前者であろうし、惑星ヴァルカンやフロギストン、ネッシーのような未確認生物について考える際は後者だろう。これらの場合には我々がそれについて考えているはずの「対象」はじつは存在しない、あるいは存在しない可能性があるように思われる。では、「何かについて」というその「何か」にあたる対象が存在しないのなら、ここには志向性はないのだろうか。しかし、志向性は心的作用にとって本質的であり必然的なものではなかったのか。また、もしここにも「志向性」というものが認められるのだとすれば、その「志向性」というものは心的世界のみで完結しており、現実の対象そのものとは関係しないように思われる。では翻って、我々が実在すると信じている対象についての志向性が、正しく実在する本物の対象そのものに関係しているということはいったい何によって保証されるのだろうか。そもそも、そうした保証は果たしてあるのだろうか。こうして、我々は対象の識別基準という問題にも導かれることとなる。

3. 内在的性質としての志向性と関係としての志向性

フッサールは、志向性を心的作用の内在的性質と考えているようなテキストを多

く残している。単に心的作用の内容の違いを特徴づける内在的性質なのであれば、それに対応する実在の対象が現実是否存在するかどうかに関係なく志向性の内容そのものは成り立ち得るだろう。じっさい、フッサールは以下のように述べる。

現象学的考察にとっては、対象性それ自身は無に等しい。というのも、それは一般的にいて作用にとって超越的であるからである。どのような意味で、またいかなる権利でその「存在」を語ろうと、あるいはまたその対象性がリアルなものであろうとイデア的なものであろうと、あるいは真実であれ、可能的であれ、不可能であれ無関係に、作用は「それに向けられて」いるのである。(XIX/1427)

ここに述べられているように、心的作用が「何を表象するような内容の作用か」という内在的特徴こそが志向性なのであれば、それは心的作用の内部で決まることであり、現実世界の中に対応する適切な対象が実在しようとしまいと、その内容の記述には無関係なはずである。だが、「それに向けられて」いるという仕方でも語られながら、にもかかわらずそのまさにそこに向けられているはずの「それ」が存在しないような「向けられている」とはいったいどのような性質なのだろうか。そしてまた、対象そのものはじつは関係がないと言うのであれば、デズデモーナの心の外にいるオセロウ本人は、自分自身を指して「デズデモーナの愛の対象はこの私だ」と述べることはできないはずである。対象が実在しようとしまいと成り立っているような心的作用の特徴が、それにもかかわらず対象そのものに対して何らかの関係を持つとはいったいどのような事態なのであろうか。

4. ジレンマの構造

以上の問題は、いわゆるジレンマの形に整理することができるだろう。つまり、ブレントラーノから引き継いでフッサールが述べていた志向性の本質的性格を重視すれば、以下の「志向性テーゼ」が主張できるように思われる。

志向性テーゼ：心的作用は本質的・必然的に志向性を持つ

そして、志向性が「何かについての」ものであるというその「何か」にあたる対象を

要求するものであるならば、このテーゼは以下のように書き換えられるように思われる。

志向的对象テーゼ：心的作用は本質的・必然的に対象を持つ

しかし同時に、フィクションの場合や科学的仮説の場合のように、対象が存在しない心的作用は広汎に見られるのであった。それゆえ以下が主張できるように思われる。

無対象表象テーゼ：心的作用は対象を持つとは限らない

少なくともこのままの表現で表面的に見る限り、志向性テーゼと無対象表象テーゼ、あるいはより直接的には志向的对象テーゼと無対象表象テーゼは矛盾するように思われる。それゆえ、矛盾を回避するためには、一見もっともらしく見えるこれらのテーゼのいずれかがじつは誤っていることを示すか、またはこれらがじつは互いに矛盾していないことを整合的に説明しなければならない。

一見したところ、この矛盾を解消することはさほど難しくないように思えるかもしれない。無対象表象テーゼが述べている通り、我々がそれについて考えている対象が必ず存在するとはもちろん限らない。このことは既に挙げた様々な事例から明らかであり、このテーゼを否定する余地はないように思われる。では、そうした思考において我々はじつは「何についても考えていない」、何も内容を持った思考をしていないということになるかと言えば、これもまたもちろんそんなことはないだろう。対象そのものは現実には存在しなくとも、我々はそれに対応するイメージや概念を心の中に形成し、対象そのものの現物の代わりにそれを用いて、それら心的な代用物について考えることで内容を持った思考を展開できているのではないだろうか。つまり、志向性テーゼも志向的对象テーゼもどちらも適切に解釈すれば正しいのだが、そこで言われている「対象」とは現物・実物のことではなく心的な像、代理物のことであり、これと無対象表象テーゼの言う「対象」とはじつは同音異義語であるがゆえに、両者のテーゼは矛盾せず両立すると考えることができるのではないだろうか。

だが、一見するともっともらしいこの解決策がまったく解決にならないことはフッサール自身が指摘している。つまり、心的作用が「何について」考えているのか、というその志向性対象、志向的对象を本来の対象そのものの現物・実物ではなくその心的代用物とみなすことによって志向性を説明しようとする理論は、我々の心的作用の実態をまったく捉え損ねてしまうのである。その理由は、我々が無対象表象の

思考においてそもそも本当は「心的代用物」について考えているのだ、と考えることによる以下のようなナンセンスな帰結について考えてみれば明らかである。

たとえば、我々が未確認生物について議論し、その実在を検証しようとしているでしょう。我々はその生物について様々な仮説をめぐらせ、その実在を信じたり、その実在を願ったりする。では我々は、そうした思考を「何について」行っているのか。そう改めて考えるならば、その答えは「その未確認生物そのもの」、その現物・実物でしかあり得ないのではないだろうか。というのも、もし我々がこうした思考を「我々が心の中に形成した心的代用物について」行っているのであれば、我々は仮説をめぐらせる必要も、不確実な憶測を抱く必要も、願望や欲求を抱き、それを満足させようと探索に赴く必要もないはずだからである。もし我々が自分の心の中に形成した「心的代用物について」、その実態や実在性を知りたいのであれば、我々は自分の心の中を振り返ればよいのである。というのも、もし「心的代用物について」考えているのであれば、我々が知りたい当の対象であるそれは我々の心の中にあるからだ。そうであるならば我々は目撃証言や生物学の知識を駆使して仮説を組み立てずとも自分の心の中を振り返ればその姿や行動様式を観察することができるし、双眼鏡や赤外線カメラを持って密林や湖底を探索せずとも心の中を一瞥すればそれ（つまり心的代用物）が存在することはすぐに確かめることができる。だが、未確認生物について心躍らせながら議論し、探索のための準備をしている人々に、「いまそれについて考えているまさにその対象を発見しましたよ、心の中をちょっと振り返ってみたら見つけました」と宣言したところで、まったく話は噛み合わないのではないだろうか。つまり、彼らが「それについて」考えている当の対象、つまりその思考の志向性の対象とは、心的代用物ではなくまさに未確認生物の現物そのもの、実物の未確認生物でなければならないのである。同様のことは、もっと卑近な例についても容易に確かめられる。「仕事に疲れたのでビールが欲しい」と言っている人に、「あなたが何について欲しがっているか」というとあなたの心の中のビールの像ですよ、それなら既にあなたの心の中にあるので、既に欲求は満たされていますよ」と説いたところで納得はされないだろう。この理屈で言えば、あらゆる欲求は抱いた瞬間に満たされていることになる。そもそも、もし心的代用物が対象なのであれば、「無対象表象」というものは存在しないことになる。我々が問題にしているのが思考の中にある心的代用物ではなくまさに現物だからこそ、問題のその当の対象が現実世界には見つからない、ということがあり得るわけである。それゆえ、そもそも我々が「何について」考えているのか、という志向性対象、志向的对象とは、無対象表象テーゼの言うまさにその当の対象と同じものでなければおかしいのである。かくして、「対象」

の多義性によってジレンマを解消しようとする安易な解決策は却下される。このことはフッサールのテキストにも明確な仕方で確認できる。

志向的内容の第一の概念については、長々とした準備は必要ない。それは志向の対象に該当し、たとえば我々がある家を表象しているならば、まさにこの家のことである。(XIX/1 414)

一方の「単に内在的」もしくは「志向的」諸対象と、他方の、場合によってはそれらに対応する「現実的」かつ「超越的」対象とのあいだに、そもそも何らかの実的区别を行うならば、それは重大な誤謬である。(XIX/1 438-439、第二版)

ではフッサールは、この問題をどのように解決するのだろうか。次節でその概略を簡潔に述べてみたい。

5. 真理検証手続きとしての意味

本節で述べるのは、前節までで確認した志向性の諸問題を整合的な形で理解するために（とりわけ初期の）フッサールが展開した志向性理論がどのようなものであったのかの概略である。はじめに述べておけば、ここでの解釈は真理概念を軸としたフレーゲ以来の現代意味論の考え方、すなわち個々の言語表現の指示対象の問題をその表現が現れる文全体の真理値決定プロセスから説明する考え方と類比的な発想をフッサールの議論に読み込むものであり、またとりわけそのプロセスを「検証」、「証明」の手続きから捉えようとするダメットの議論からフッサールの「意味」概念を理解しようとするものである。フレーゲやダメットと異なり、フッサール自身はこうした考え方をそれほど明示的にはっきりと述べているわけではない。しかし、『論理学研究』を中心にフッサールの多くのテキストはこうした理解のもとで自然にその議論を追うことができるし、またフッサールが逡巡や迷走を見せている箇所についても、なぜそうってしまったのかの思考の筋道を明瞭に理解することができる。こうしたテキスト上の傍証についてはこれまでも拙論の多くで言及してきたが、まとまった形で検討したい読者にはとりわけまずは拙著（富山 2023）をご確認いただきたい。

では、フッサールの（とりわけ初期）志向性理論とはいったいどのようなものだったのか。まずその説明の課題を確認しておけば、我々のそれぞれの心的作用が他のどれでもなく特定のこの対象についてのものであるということ¹を、その当該対象が現実世界において実在するかどうかにかかわらず、その心的作用の内容において与えられている内在的性質に基づいて、その対象それ自体とは異なる心的代用物などとの関係ではなくまさにその対象そのものの現物に関係するものとして成立させているものがどのような仕組みなのかを説明することである。

いったいどのようにすればこの課題を満足するような説明が可能だろうか。そのヒントは、なぜ志向性の対象は心的代用物などではあり得ないかを明らかにした先程の説明にある。そこで述べられていたことを確認しよう。未確認生物について考えている際に我々の志向性の対象を心的代用物と考えることができないのは、その未確認生物についての様々な仮説や推測の真偽が心的代用物の在り方によっては決着しないからであった。このことを別の角度から述べ直せば、志向性の対象とは要するに、当該の思考の真偽がそれによって決まるようなものだ、ということになる。たとえば、我々が昼休みに入った際に「職場の最寄りにあるラーメン屋はいま営業しているはずだ」と考える際、この真偽を確かめるのに自宅の近所のコンビニの営業時間を調べても意味がない。また同様に、私の心の中にある「職場の最寄りにあるラーメン屋」のイメージをいくら眺めても決着はしないだろう。この真偽が決着するのはまさに「職場の最寄りにあるラーメン屋」という対象それ自身によってであり、他のいかなる対象によってでもない。それこそが、当該の思考が「職場の最寄りにあるラーメン屋についての」思考であるということそのものである。本稿では立ち入らないが、これはフレーゲの「意味 (Bedeutung)」を「(文全体の) 真理値への寄与」として特徴づけたダメット、トゥーゲントハットらの解釈と共通するものである（富山2023の第二章を参照）。

以上の議論は、ことさらに述べるまでもなく当たり前のことを迂遠な仕方で述べているように思われるかもしれない。だが、フッサールの（とりわけ初期の）テキストを読むうえで躓きがちなのがこの観点なのである。たとえば、以下はすべてフッサール自身の挙げている例を説明の都合に合わせて若干改変したものであるが、「ナイ

1. 正確に言えば、志向性の対象は一定範囲の不特定のものでありうる。たとえば、「おなかですいたので何か食べたい」というとき、その志向性の対象は不特定の食べ物一般であって何か特定のひとつの食べ物ではない。しかし、そのときでも、食べられないようなものはこの欲求の対象にはならないのだから、この場合もやはりその欲求において我々はある特定の一定範囲のものについて考えているのであり、それ以外のものについてはない、という形で志向性は成り立っている。

フが机の上にあるということは望ましい」、「皇帝の表象はいま私の抱いている心的作用である」、「人間のクラス（人間全体の集合）は70億以上の要素を持つ」といった思考（判断）を例に取ろう。フッサールは、ここでの「ナイフが机の上にあるということ」というのは「ナイフが机の上にあるという事態」を指示しているのか、「ナイフが机の上にあるという判断」を指示しているのか、「ナイフが机の上にあるという命題」を指示しているのか、どれがこの表象の志向的对象であるのかということの問題にする。また、「皇帝の表象」という表象は「皇帝」という表象と同様に皇帝を指示するのか、それともそうではないのか、さらに「人間全体のクラス」という表象と「すべての人間」という表象は同じ対象を指示するのか、と問う²。素朴に考えれば、「ナイフが机の上にあるということは望ましい」と考えるとき我々は「ナイフが机の上にあること」を思い浮かべるような心的作用を遂行しているだろうし、またその際「ナイフが机の上にある」という命題を理解してもいるだろう。それゆえここで我々が何を志向的对象としているのかということ、単に漠然と「何が心に思い浮かべられているか」といった仕方で理解してはフッサールの問いにまったくついていけなくなってしまう。同様に、「皇帝の表象」、「皇帝の表象の表象」、「皇帝の表象の表象の表象」、といくら入れ子にしても、我々は最初に思い浮かべた皇帝のイメージから何か劇的な変化を心のうちに見出すわけではない。それゆえ、これらの志向的对象の違いを説明せよと言われても、漠然とそれらのイメージを見比べるだけでは明瞭な説明は困難である。また、「人間全体のクラス」と「すべての人間」という表現はどちらも多数の人間たちの集まりをイメージさせるだけであり、両者の対象の違いもまた何か明確な基準なしに説明することは困難だろう。それゆえフッサールのこうした議論を理解するには、「真理値決定の仕方」という基準を明確に意識しておくことが必要なのである。どういうことか。

「ナイフが机の上にあるということは望ましい」ということの本質は、「ナイフがじっさいに机の上にあるというその客観的な事態そのもの」が望ましいことであるかどうかによって決まる。それは「ナイフが机の上にあると心の中で判断すること」や類似の心的作用のあれこれが望ましいか否かによっては決まらないし、「ナイフが机の上にあるという命題」の望ましさによっても決まらない。同様に、「皇帝の表象はいま私の抱いている心的作用である」ということの本質は、表象について調べ、それを私がいま心に抱いているか否かによって決まるのであって、皇帝それ自身の性質によって決まるものではない。「皇帝の表象」という表象を「皇帝」という単純な表象に対して「皇帝の間接的表象」と呼ぶことは不可能ではないかもしれないが、し

2. これらはそれぞれ XIX/1 416, Mat. I 99, XXVI 53-54 の例を改変したものである。

かしそれは「皇帝」を複雑で間接的な仕方で指示するための表象、たとえば「帝国の正当な手続きに従ってしかじかの仕方で戴冠した者」といった表象とは異なる。後者は間接的な仕方ではあれ結局は皇帝についての表象であり皇帝を志向的对象としているのに対して、前者の対象はあくまで皇帝の表象であり、皇帝ではないからである。そしてまた、「人間のクラス(人間全体の集合)は70億以上の要素を持つ」の真偽は集合を調べることによって決まることであり、個々の人間を調べることによって決まらない。この点で、「すべての人間は心臓を持つ」のような判断とは志向的对象を異にするのである(後者は個々の人間を調べ、心臓の有無を判定しなければ決着しない)。

だが、以上の議論は単に問題を先送りにしただけではないだろうか。当初の問題は、心的作用のうちの何がその作用のある特定の対象についてのものたらしめているのか、という問いであった。ここでは、それを「心的作用のうちの何がその作用のある特定のものによって真偽の決着がつくものたらしめているのか」という別の問いに先送りにしただけではないだろうか。しかし、ここには単なる先送りではない説明の前進がある。

我々が思考するとき、その「対象」が何であるか、その当の対象の現物は一般には眼前に与えられているとは限らない。だからこそ、その対象が存在しないという可能性もあり得たわけである。だが、対象そのものは不在でも、その対象をどう探せばよいか、考えていた当のその対象であるかどうかはどのようにして判定できるのか、その思考の真偽をどのように確かめればよいのかという「検証方法」、検証ないし証明のための手続きはあらかじめ意味内容として理解されている。

心的作用の意味内容のこの手続き的性格は数学の場合にわかりやすい。我々は「7番目の素数」という言葉を聞けばすぐにその意味を理解し、7番目の素数について考え始めることができる。そのとき、それが17であるとあらかじめわかっている必要はない。志向性の成立、つまり我々が「7番目の素数について考えている」と言えるために、その対象である17という数が見て取られている必要はない。そうではなく、2, 3, 5, 7, 11, 13, 17と、1とその数自身を約数に持つ数を小さい方から7つカウントすればよいのだ、という手続きがわかっているだけでよいのである。逆に、こうした手続きで発見されるものだ、ということがわかっていなければ「7番目の素数について考える」ということはできないだろう。それはつまり「7番目」や「素数」ということの意味がわかっていないということだからである。

そして数学の場合にも、こうした対象は存在するという確証がなくてもよい。たとえば、その数自身以外の約数の和がその数自身に等しくなる数、たとえば $1+2+3=6$

となる自然数 6 や $1+2+4+7+14=28$ となる自然数 28 のような数を「完全数」と呼ぶが、現在発見されている完全数はすべて偶数であり、奇数の完全数が存在するかどうかは知られていない。しかし、 $1+2+3=6$ なので 6 は完全数、 $1+2+4=8$ ではないので 8 は完全数ではない、 $1+2+4+7+14=28$ なので 28 も完全数といった手続きは「完全数」の意味を知っていれば容易に把握できる。ある与えられた自然数の約数を列挙することは容易にかつ機械的に実行可能な手続きであり、その和を元の数と比較することもまた同様に容易である。それゆえ、この完全数判定の手続きと、2 で割った余りで偶奇を判定する、という手続きがあれば、「自然数を最初から順に調べていき、最初にこの手続きを双方ともにクリアしたもの」という仕方で「最小の奇完全数」について考えることは容易にできる。それがどの数なのかは誰も知らないし、存在するかどうかさえおそらく誰も知らないが、それでも「その対象そのもの」について考えることができるわけである。

同様のことは、対象が存在しないという確証のある場合でも言える。2 の平方根を整数比で表す分数表示や正千面体といった対象の場合がそうであるが、非存在の証明がより簡単な例で考えよう。たとえば我々は「6 以外の一桁の完全数」について考えることができるが、それが存在しないことは先述の手続きによって一桁の自然数を風潰しに調べれば容易に確かめられる（完全数はかなり希少で、6, 28, 496, 8128, 33550336...と続く）。それが可能なのは「(もしあるとすれば) どのような手続きで発見される対象のことを考えているのか」を把握しているからである。同様に、我々は 2 の平方根の整数比を表す分数表示について考え、それについての推論を積み重ねることで矛盾を導き、2 の平方根が無理数であることを背理法によって示すことができる。こうした思考が可能なのも、我々が「2 の平方根の整数比を表す分数表示」という背理を含む対象についてさえ、それがもしあるとすればいかなる対象なのか、すなわち互いに素な整数の組で表される有理数であって、その自乗が 2 に等しくなるという条件を満たすものである、ということがあらかじめ理解されているからである。

経験科学の場合であれば、水星の近日点移動を説明するために水星のさらに内側の軌道に存在が推測された惑星ヴァルカンがよい例だろう。惑星ヴァルカンは結局存在が否定された（近日点移動は相対性理論の登場で既知の惑星から説明できた）が、だからといって「惑星ヴァルカンについて考えていた」という志向性が否定されるわけではない。それはなぜかと言えば、「しかじかの軌道を探せば見つかる天体」、「しかじかの条件を満たす天体」という仕方で科学者たちが発見の手続き、候補の判定方法を持っていたからだろう。手続きの実行の結果、じっさいには条件を満たす対象がもし見つからなくても、「この手続きで見つかる対象のことを考えていた」とい

う志向性は残る。手続き、条件の存在によって、当該の対象であるか否か、ということ特定する識別基準は確固として保証されているからである。このことは、たとえ結果として対象が見つからなくとも、つまりあらゆる対象候補が当該の条件によって「当該の対象ではない」と却下されようとも変わらない。「何について考えているのか」、つまり何が当該の志向的对象であるかということはあらかじめ定まっているからである。

そして、この惑星ヴァルカンの例で考えれば、心的な代用物を志向的对象として立てるような説明が不可能である理由は明白だろう。科学者たちの持っていた手続きで探索されるのは宇宙空間であって、そこに「心的イメージ」が発見される可能性はない。心的イメージを探しているのであれば夜空に向かって望遠鏡を覗き込む必要はなく、自分の頭の中を探せばよいからである。

6. 充実化手続きとしての志向性

以上の議論をフッサールの用語法に引き付けて説明し直せば、これは我々が「可能な直観的充実化への手続きや分類基準を把握している」ことによって対象への志向性を成立させているということに他ならない。フッサールは、知覚を典型として対象を「直接に目の当たりにする」経験を「直観」と呼ぶ。これまで述べてきた計算手続きや探索手続きといった発見の手続きは、要は「対象を直観にもたらしめるための手続き」のことである。

惑星ヴァルカンの知覚直観は存在しないし、存在し得ないことを確証すること（幻滅）さえできる。しかしそれによって「惑星ヴァルカンとはどのような仕方でそれが直観されるものであるか」、「どのような直観がその対象の直観としてカウントされるものであるか」といった可能的充実化の分類基準、充実化へ向けての手続きの把握までなくなるわけではない。この基準・手続きは充実化以前から心的作用のうちで把握された内容として存在し、対象の存在、すなわち充実化の可能性が否定されても残る。

7. 対象の真正性

しかし、そうした手続きによって我々が「本物の対象そのもの」、その「現物」に

関っているということは本当に明らかなのだろうか。なぜ当該の対象が「本物」だと言えるのか。確かにそれは心的な代用物ではないとしても、我々が本物の対象だと思って経験している物の他に（いわば背後に）、本当の正解である「物自体」が存在するという可能性はないのだろうか³。

ある意味では、この問いには「ない」と言い切つてよいように思われる。それは、「そもそもそうやって見つかるもののことを、そうして経験されるもののことを我々が問題にしているから」である。

もし「本物の対象」というものを我々の経験と関係なく神やら世界やらの側で「正解」と決められているのであれば、確かに我々の経験がそれを当てられる保証はない。しかし、我々はそもそもそんな対象のことは考えていない。「それ自身以外の約数を全部足してみてもそれ自身になることが最初に見つかった数が6だからといって、本当に本物の最小の完全数そのものはそれではないかもしれないよ」というのは意味不明である。我々はそもそも「そうした仕方で見つかるような数のことを最小の完全数と呼び、そのことを考えている」のだから、神であれ世界であれ何であれ、それでないようなものが「正解」として差し出されても「我々はそんなものことは考えていません」という話であり、そんな自称「正解」はそもそも「お呼びでない」わけだ。「ビールが飲みたい」と欲している人は、幻や麦茶ではなくじっさいに飲めてほどよく酔えるようなそうした既知の仕方で見つかる我々が発見できる「本物のビール」を求めているのであり、我々の経験を越えた「ビールそれ自体」などというものが与えられても、それが我々にビールとして出会われ、経験されるビールでないならば、そもそもそんなものに用はないのである。

8. 時間意識の志向性といくつかの補足

かくして、当初の課題であった志向性の整合的な説明を一通り達成し得たように思われる。このように志向性を捉えることは、志向性を単に「方向性」、「対象の内在」といった静態的なイメージで捉えるのではなく、「正当化の経験の進行」という動的・連続的なネットワークによって捉えることを意味する。このことを支えているのが「時間意識」の志向性であり、それゆえ本誌『フッサール研究』前号掲載の柳川論文における「鍵概念（1）」である「時間」が、まさに「フッサール現象学の鍵概念」であった理由はここにある。

3. なお、ここで言う「物自体」は必ずしもカントの意味でのそれとは限らない。

時間意識の構造について詳しくは柳川論文を読んでいただくとして、ここでも本稿で提示した志向性の一般理論の観点から若干のコメントを付しておきたい。しかしその前に、真理値を持たないような内容の心的作用、すなわち真偽を問うことがカテゴリー錯誤であるような種類の思考と、その中でもとりわけ知覚のような直観作用そのものの志向性の問題について触れておきたい。

前節までで論じたように、真偽が問いうるような内容を持つ心的作用の志向性については、その真偽の検証手続きの把握という仕方で志向性の成立を説明することができた。しかし言語哲学でもよく言われるように、真偽を問いうるのは事実を主張するような平叙文を用いた言明だけであり、疑問文や命令文、祈願文などに真理値を付与することはそのままではできない。つまり、「火星に生物が存在する」という文の真偽は問うことができても、「火星には生物がいるのだろうか」や「火星には何が存在するのですか」という疑問文は真でも偽でもないし、「火星に生物を探せ」という命令文や「火星に生物がいたらなあ」という願望を述べる文もそれ自体では真でも偽でもない。では、このような文（およびそれに対応する心的作用）の志向性は、先述の仕方では説明できないのだろうか。

じつは、フッサールはこうした真理値を持たない内容を持つ心的作用の志向性についても説明の道具立てを用意している。フッサールがここで用いる道具立ては、「作用質料 (Aktmaterie)」と「作用性質 (Aktqualität)」の違いである。ここで問題になっているようなこれらの発話は、そもそも主張をしていないので真でも偽でもない。つまり、それらは主張、すなわちフッサールの言葉で言えば言明ないし言表 (Aussage)、あるいは判断 (Urteil) とは異なる作用性質を持ち、語られている事実・事態に対して異なる態度をとる。他方、「火星には生物がいるのだろうか」という疑問や「火星に生物がいたらなあ」という願望には「火星に生物がいる」という主張と共通の内容が含まれており、これがフッサールの言う「作用質料」である。主張以外の作用、たとえば疑問や願望についても、それがどのような内容の心的作用なのかを考えるには作用質料が重要な役割を果たすことは明らかだろう。作用性質としては同じ「願望」でも、「火星に生物がいたらなあ」という願望と「月に生物がいたらなあ」という願望は同じ内容ではない。そしてその違いは、願望が「どのような条件で叶ったとみなされ、達成ないし満足されるのか」という条件の違いと考えてよいだろう。そうだとすれば、それは対応する同一質料の主張である「火星に生物がいる」の真理条件とちょうど対応するはずである。つまり、この主張が真になるとき、前者の願望も達成されるのである。疑問や命令についても、同様の仕方で対応する主張の真偽から内容の違いを説明することができるだろう。つまり、主張的な作用性質を持つ

心的作用の志向性が説明できれば、その他の作用性質を持つ心的作用の志向性は、いわばそこからの派生態として説明できるのである。

だが、検証や達成といったある種の「充実化」の可能性を持っている心的作用についてはそれでよいとしても、逆に充実化を与える側の作用である「知覚」の志向性はどうなってしまうのだろうか。知覚には志向性はないのだろうか。しかしフッサールは、志向性の規定に言及する際に何よりもまず知覚を例に挙げていなかっただろうか⁴。事柄の上で考えても、我々の知覚が「何らかの対象についての」知覚であることは明らかのように思われる。

ここで知覚の志向性について詳述する余裕はもはやないので、概略のみコメントしておこう。まず言えるのは、知覚が充実化を与えるためには、充実化が与えられるところの真偽不明だった作用（「空虚志向」などと呼ばれる）がそれについて真偽を問題にしていたところの対象と、「同じ対象」についての知覚でなければならないということである。「いま外は雨だろう」という推測を充実化するのは外の天候の知覚であって、浴室やキッチンに水滴を確認してもこの推測に充実化を与えることはできない。それゆえ、知覚もまた「どの対象についてのものであるか」という弁別特性を持っているのであり、したがって主張や推測、判断のような作用が「可能な充実化」とのネットワークによって志向性を得ていたのと同様に、いわば「可能な被充実化」とのネットワークによってその志向性を得るのである。

また、知覚は単に一方的に充実化を与えるだけではないことにも注意が必要である。フッサールが強調するように、知覚はその対象についての「すべて」を十全に我々に与えてくれるわけではない。対象にはまだ我々には見えていない側面、我々にはまだ知られていない性質があり、「その対象についての」さらなる充実化の余地を残している。それゆえやはり、知覚に対しても、「その同じ対象についての充実化がどのような手続きで可能であるか」という一連の可能な充実化に対するネットワークは結びついているのであり、それによって知覚には充実化を受ける側の作用と同様に志向性が成り立っているのである⁵。

最後に、時間意識の志向性について若干のコメントを書き残しておく。フッサールの時間意識論のポイントは、時間的に持続したり変化したりするようなものをそれ

4. 先にも引用した XIX/1 380 のテキストを参照。

5. この意味において知覚が志向性を持つということの強調、そして未規定性の可能な充実化の広がりというこの論点とフッサールの「地平」概念との繋がりについては、本来ならば Hintikka 1975 および Smith & McIntyre 1982 との比較検討をすべきであるが、本稿では立ち入る余裕がない。なお、地平概念との関りについては富山 2013 も参照。またそこでのノエマ解釈の不十分な点については富山 2014 で補完している。

として経験するためには、その経験の志向性の構造はどのようになっていなければならないか、ということの分析にある。フッサールが好むメロディの例で言えば、「ドレミ」の順に三音が聴こえたとき、それを「ドレミ」という音の継起として聴くためには、「ミ」が聴こえた段階でなお「ド」と「レ」の意識を何らかの仕方で保持していなければならない。そうでなければ、我々はその都度の時点でただひとつの音を意識するだけであり、それを一連の「継起」として聴くことができない。だがそれは、「ド」と「レ」の知覚が「知覚として」残っているということではない。そうなればそれは「ドレミの三音が同時に鳴っている」という知覚になってしまい、「ドレミの順に継起する音」の知覚にはならないからである。それゆえ、先の願望の例において「火星に生物がいたらなあ」という願望が「火星に生物がいる」という主張のいわば派生状態だったのと同様に、「ドの知覚」はその内容を保持しつつ、「先程は現在の音として知覚されていたがいまは過ぎ去ったもの」という理解にその意味内容を変様させつつ意識のうちに残るのである。これが「把持 (Retention) の志向性」である。「ドの音がいま鳴っている」と「ドの音が先程鳴った」とはその真理条件、検証条件が異なるのであり、したがってその意味で、本稿で議論した「志向性」の延長線上に把持の志向性も位置づけられることがわかるだろう。同様に、「ドレミ」の音を聴きながら次に「ファ」の音が鳴ることを期待しているとき、それは「ファの音がいま鳴っているのではないか」という推測とは異なる真理条件、検証条件を持っている。それはいまファの音が鳴っていることによっては充実化されず、ミの音が把持のうちに過ぎ去りゆく中で、次にファの音が知覚されることによるのみ充実化されるのである。それゆえ、次の瞬間の未来への「予持 (Protention)」の志向性もまた意味内容の変様として考えることができる。以上の議論は、過去や未来についての意識がそもそも「過去や未来についての意識として」理解されるための意味上どうしても必要な本質的構造の議論であり、よく誤解されるように、聴いた音がすべてそのまま忠実に記憶のうちに保管されるとか、未来の音がすべて正確に予測できるという話ではまったくない。たとえ記憶があやふやであったり次に何の音がくるか逡巡したり間違えたりしたとしても、それでも我々がそれを「過去・現在・未来の一連の継起」として経験するためにはそこにどのような意味理解の構造がなければならないのか、という志向性の形式の分析がここでは為されているのである⁶。

6. なお、本稿のような観点からの把持の解釈についてより詳しくは富山 2015、予持の解釈については柳川氏との共同発表「未来が直線状に伸びているという描像について」(https://youtu.be/1f4LGWg0hdQ?si=NzN_xkBIFswfrebW)を参照。

文献リスト

Jakko Hintikka, *The Intentions of Intentionality and Other New Models for Modalities*, Reidel, 1975

David Woodruff Smith & Ronald McIntyre, *Husserl and Intentionality: A Study of Mind, Meaning, and Language*, Reidel, 1982

富山豊、「フッサール中期志向性理論におけるノエマと地平の意義について」、『現象学年報』第29号、日本現象学会、2013、pp. 141-148

富山豊、「フッサール中期志向性理論における「対象」の同一性と「ノエマの意味における規定可能なX」」、『哲学』第65号、日本哲学会、2014、pp. 242-256

富山豊、「フッサール初期時間論における過去の構成と過去の実在性」、『現象学年報』第31号、2015、pp. 171-178

富山豊、『フッサール：志向性の哲学』、青土社、2023